

薮勇造著

『シェバの女王——伝説の変容と歴史との交錯』

ヒストリア022, 山川出版社, 2006年, 191頁, 定価1300円+税

栄華を極めていたソロモン王のもとをシェバの女王が訪れ、その叡智に驚嘆したという『旧約聖書』列王記の簡潔な記述は、その後幾多の潤色を加えられ、シェバの女王伝説として複雑な発展を遂げることとなる。日本人にとって馴染み深いものとは言えないが、欧米においてこの伝説への関心は高く、その研究の蓄積には眼を見張るものがある。本書は、シェバの女王の出身地と目される南アラビアの古代史研究を専門とする著者が、この謎に満ちた愛すべき伝説を解説したものである。

本書の構成は以下のとおりである。

1. シェバの女王伝説
2. ユダヤ教世界におけるシェバの女王伝説
3. イスラーム世界におけるシェバの女王伝説
4. キリスト教世界におけるシェバの女王伝説
5. エチオピアにおける女王伝説の展開
6. 歴史と伝説の交錯

シェバの女王の国の所在地については、古来より南アラビア説とアフリカ説が並立してきた。現在では、多くの研究者が『旧約聖書』の女王に関する記述の史実性を否定しつつ、それに合理的な解釈を施そうと試みている。第1章では、著者が専門とする古代南アラビア史の知見に基づいて、これらの問題の検討が行なわれる。

紀元前後のユダヤ人社会にシェバの女王の逸話が流布していたことは、『新約聖書』の「マタイによる福音書」に見えるイエスの発言に窺える。女王についてイエスは、ソロモンの智慧を聞くために「地の果て」から来たことを好意的に評価しているが、それから数世紀後の中世ユダヤ教文献では、女王は極めて毛深い脚を持つという奇怪な姿で登場し、魔女リトと同一視されるようになった。第2章で取り上げられるのは、ユダヤ教世界において、このようにシェバの女王が異形視されるに至った理由である。

第3章では、イスラーム世界におけるシェバの女王伝説が語られる。『コーラン』において太陽崇拝を廃してアッラーを崇拝するようになる異教徒として登場する女王は、その後のイスラーム世界の文学や史書にビルキースという名で登場する。ここで著者が注目するのが、古代南アラビアのトゥッバア朝の系譜において、3世紀半ばから後半にかけてソロモンとビルキースが在位したとされていることである。この問題に関して著者が展開する議論は、アラビア半島及びその周辺地域の歴史を研究する者にとって大変興

味深い。

第4章で対象とされるのは、キリスト教世界におけるシェバの女王伝説の展開である。キリスト教世界においても、女王は悔い改めて改宗する異教徒として好意的に受け入れられ、女王のソロモンとの会見は絵画や彫刻の主題として好まれた。著者は、中世ヨーロッパにおける女王伝説の重要な展開として、イエスの磔刑に用いられた十字架の数奇な運命を物語る聖十字架伝説の中に、女王伝説が組み込まれるようになることを指摘する。本章では、この聖十字架伝説の解説が行なわれた後に、ルネサンス期以降のヨーロッパの音楽や文学に現れるシェバの女王が紹介される。

第5章が対象とするエチオピア北部のキリスト教徒地帯は、シェバの女王伝説が王朝の正統性や民族のアイデンティティの拠り所となっている点で特異である。この地のキリスト教徒の間には『ケブラ・ナガスト（諸王の栄光）』という書が伝わっている。それによれば、女王はソロモンの息子を身ごもり、この息子がイェルサレム神殿に安置されていた聖櫃（契約の櫃）をエチオピアにもたらしたという。本章では、『ケブラ・ナガスト』に見えるこのようなエチオピア版女王伝説の内容が解説される。

イェルサレム神殿から忽然と姿を消した聖櫃がエチオピア北部に実在するという伝説は、近年世界的に注目を集めている。第6章では、この伝説と『ケブラ・ナガスト』の成立年代に関するエチオピア史研究者マンロウ・ヘイの見解の是非が論じられる。エチオピア史にも精通する著者の見解が開陳されており、非常に興味深い。最後に著者は、エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝をメシアと信じるジャマイカのラスタファリ運動の信奉者たちによって、エチオピア版女王伝説が『聖書』に等しい扱いを受けるに至った事情を説明し、筆を擱いている。

以上が本書の概要である。このように『旧約聖書』のシェバの女王に関する記述は、ユダヤ教世界・イスラーム世界・キリスト教世界において複雑に発展した。そしてエチオピア北部のキリスト教社会では、女王伝説は民族のアイデンティティの拠り所となり、さらにジャマイカのラスタファリ運動にも大きな影響を与えることになる。シェバの女王伝説が辿ったこの壮大な道のりを、著者は海外における最新の研究と自身の研究成果を交えつつ、平易に解説している。専門的な内容を扱いつつ、著者の筆致は時として軽妙である。ソロモンがシェバの女王のもとに使いとして送った鳥である戴勝（ヤツガシラ）と濫澤龍彦氏の意外な関係、19世紀フランス幻想文学に登場する魅惑的な女王たち、ユダヤ教系女王伝説に由来すると思われるフランスの「鷺鳥足の女王」をラベルに描いたワインの挿話など、本書には、文学・絵画・映画等に関する著者の該博な知識が随所にちりばめられており、読む者を飽きさせない。本書は学術書の体裁をとっていないものの、地域と時代を超えて融通無碍に転変するシェバの女王伝説を理解する上で、研究

者にとっても今後欠かすことのできない書となろう。

(石川博樹)

清水和裕著

『軍事奴隸・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』

山川出版社，2005年，195頁+52，定価5000円+税

本書は、アミンとマームーンの内乱以降のアッバース朝解体期におけるカリフ体制とイラク社会の変容について、多面的に検討した研究書である。著者の博士課程論文を基に『史学雑誌』等に発表した論文を加え、再編集したものであり、現段階における著者の研究の集大成といえる作品である。以下、各章の概要を簡単に紹介したい。

第一章「軍事グラーム集団の形成」は、カリフ・ムータスィムの導入した新軍団であるマワーリー軍団とその中核を占めるトルコ系グラーム軍（アトラーク奴隸軍団）を取り上げ、マムルーク朝奴隸軍人制度との差異を意識しつつその実態を示すことにはじまり、軍団内部の変質を通じたアトラーク武将の有力化と家産管理集団の成立とともに、独自の「私的軍事集団」を形成する過程を明らかにする。またグラーム軍団形成の歴史的背景として、中央アジア的忠誠心のあり方とアラブ的ワラー（保護-被保護）紐帯の存在を指摘し、ワラーとイスティナー（主人による「養育」）による擬制の血縁関係に組み込まれたグラームをカリフや有力者の「イエ」の構成要素として分析する。著者はグラームやハーティム（主として宦官を指す）といった「イエ」における従属的奉仕集団の非軍事のかつ広範な役割について詳論し、グラームの職務の軍事化を有力者の「イエ」が軍事化する歴史的潮流に対応するものであると位置づけている。

第二章「書記官僚と税務行政」では嶋田襄平氏による軍事イクター制研究の再検証を前提としながら、アッバース朝解体期における土地所有制度と国家の財務制度の変容をめぐる考察を展開している。著者は、アッバース朝初期の国家的土地所有理論が官僚や軍人による私領地形成の進行、さらには軍事イクター制の確立によって崩壊していく様相について、租税、すなわち「国庫の取り分」の徴収という観点から論じている。私領地形成の動きは有力者の「イエ」による家産形成に深く関わるものとして、社会レベルにおける「イエ」形成と国家レベルにおける税収のあり方の相関関係を提示する。そして国庫の取り分を確保・削減するための書記官僚たちの政治手段に言及がなされ、より強い政治的影響力を持つ官僚の「正当性」の論理が、国家と私領主の関係を決定していたことを指摘する。アッバース朝解体期の政治状況においては、官僚の保持した影響力は極めて不安定であり、その結果財政業務も流動的展開を遂げたという結論に達してい